

氏 名 藪 耕太郎
 学位の種類 博士（社会学）
 学位授与年月日 2010年3月31日
 学位論文の題名 武道の海外への伝播に関する社会史的研究—前世紀転換期の南北アメリカにおける柔術の普及／受容過程を中心に—

【論文内容の要旨】

1. 本論文の概要

本論文は前世紀転換期における武道の海外への伝播過程について、武道の普及と受容に際する相互の歴史社会的関係を踏まえて考察し、武道の海外伝播に関する通説的な学説を批判的に検討しつつ、新たな歴史像を構築することを目的としている。

最初に論文の構成ならびに第1章から7章までを簡潔に記しておきたい。

序章

1. 研究目的及び意義
2. 先行研究の検討
3. 研究の方法

第1章 柔術の変容と柔道の誕生

—明治維新から20世紀初頭に至る柔術・柔道の国内における動向に着目して—

1. 明治維新後の柔術の展開
 - 1-1. 見世物としての柔術
 - 1-2. 地方における柔術の様相
 - 1-3. 新興流派の誕生と柔術の新しい普及形態
2. 講道館柔道の成立発展過程と嘉納治五郎の柔道観
 - 2-1. 講道館の誕生と嘉納の理念
 - 2-2. 見世物としての柔術に対置する嘉納の娯楽観

第2章 柔術・柔道の海外への紹介を巡る言説空間の構成と意味

—前世紀転換期における柔術・柔道・外国人の言説上の位相—

1. 外国人／日本人による柔術・柔道の海外への紹介
 - 1-1. 幕末から19世紀末における外国人による紹介
 - 1-2. 嘉納治五郎と志立鉄次郎による紹介
2. L・ハーンとE・ベルツの柔術・柔道観
 - 2-1. ハーンの柔術・柔道観
 - 2-2. ベルツの柔術・柔道観
3. 柔術の起源論を巡る相違
 - 3-1. 日本起源説と中国由来説

3-2. 「自文化」を編み出す試み

4. 武道の通史において外国人に付与された役割とその意味

第3章 日本人柔術家・柔道家の渡米と普及

—前世紀転換期のアメリカ合衆国における普及活動の多様性に着目して—

1. 柔道の海外進出

1-1. 嘉納治五郎による柔道の海外普及の理念

1-2. 嘉納の普及理念の体现者

1-3. 山下義韶による普及活動の意味

2. 柔道の海外普及の多様性

2-1. 前田光世の渡米と普及活動

2-2. 前田による見世物試合の意義

2-3. 日本人移民と柔道

3. 柔術の海外進出

3-1. 柔道家・日本人移民からみた海外における柔術の位置

3-2. 日本人柔術家による普及活動

3-3. 柔術教本とオリエンタリズム

第4章 外国人による柔術の海外普及とその回路

—前世紀転換期に日本で柔術を学んだアメリカ人による帰国後の活動—

1. 長崎における外国人と柔術との出会い

1-1. 居留地におけるスポーツ

1-2. ジョン・J・オブライエンと外国人ポリス制度

1-3. リッシャー・W・ソーンベリーとシーメンズ・ホーム

1-4. 外国人による柔術の受容

2. 柔術普及の場所と方法の多様性

2-1. 講演活動やデモンストレーション

2-2. ルーズベルトへの柔術指南とその後の活動

2-3. 駐屯地における柔術の指導

3. アメリカ人による柔術教本の出版とその意味

3-1. 天真流柔術の紹介とその継承

3-1-1. 柔術の固有性への拘り

3-1-2. 継承される「柔術」とその変容

3-2. 柔術から“Jiu-Jitsu”へ

3-2-1. “Physical Culture”との結びつき

3-2-2. 医文化との接合

第5章 アメリカ合衆国における柔術ブームとその後の受容

—日露戦争期の現地メディアにみる柔術像の変遷と柔術の変容を中心に—

1. 20世紀初頭のアメリカの言説空間にみる柔術ブームの実相
 - 1-1. “The New York Times” にみる日露戦争と柔術
 - 1-2. 柔道の紹介とその認知
 - 1-3. 東勝熊によるメディアへの露出
 - 1-4. スポーツ新聞紙上における柔術記事の連載
2. 柔術教本にみるハンコックの柔術観と意図せざる倒錯
 - 2-1. ハンコックの帝国主義的心性と柔術への興味
 - 2-2. 身体鍛練と護身術
 - 2-3. 学校体育と公衆衛生
 - 2-4. 女性と柔術
 - 2-5. 嘉納とハンコックの同時代性
3. 民衆のアンビバレントな感情と「解剖」された柔術
 - 3-1. 民衆の柔術への興味と検証の場としての異種格闘技試合
 - 3-2. 「反則」としての柔術と「アンフェア」な日本人
 - 3-3. アメリカ体育協会と「解剖」された柔術
4. 新しい柔術の担い手の台頭と意味変容
 - 4-1. レスラーによる柔術の受容と普及
 - 4-2. 女性が柔術に付与する意味の変容

第6章 福岡庄太郎によるアルゼンチンへの柔術の普及とその受容

—1905年から1915年までを中心に—

1. 前世紀転換期における日亜関係と柔術・柔道
 - 1-1. 福岡庄太郎の渡米と欧米巡業
 - 1-2. 日露戦争とアルゼンチン
 - 1-3. 緒方義雄の来亜と柔道指導
 - 1-4. 南米における柔術家・柔道家の位相
2. 警察と柔術
 - 2-1. 福岡庄太郎によるロサリオ市警における柔術の指導
 - 2-2. 現地新聞にみる英仏の警察官への眼差しと柔術
 - 2-3. 柔術に向けられた眼差しの二重性
3. スポーツクラブと柔術
 - 3-1. ホアン・B・アロスピデガライとロサリオスポーツ協会
 - 3-2. アロスピデガライの理念
 - 3-3. 体操剣術クラブにおける柔術
 - 3-4. スポーツクラブにおける柔術の受容の意味

第7章 福岡庄太郎によるパラグアイへの柔術の普及とその受容

—1916年以降における活動を通じて—

1. 前世紀転換期におけるパラグアイの状況とスポーツ・柔術への眼差し
 - 1-1. パラグアイの近代化過程にみる諸問題
 - 1-2. 現地既存のスポーツに向けられた批判と期待
 - 1-3. 心身鍛練および護身術としての柔術
2. 現地社会における CGE の役割
 - 2-1. 啓蒙的なスポーツ・社交機関としての CGE とその構成
 - 2-2. CGE における柔術の受容
 - 2-3. CGE から民衆への娯楽の提供とその意味
3. 娯楽としての柔術
 - 3-1. マッカランの来訪と試合に至る経緯
 - 3-2. 非日常的な空間の創出
 - 3-3. 観客の反応
 - 3-4. 柔術のフレキシブルな活用
4. 1916年以降の福岡の活動
 - 4-1. 福岡の活動領域の拡大とその要因
 - 4-2. 私設領事としての活動
 - 4-3. 日本とパラグアイを結ぶ架け橋としての活動
 - 4-4. 武道の海外伝播のダイナミックな歴史像

終章

1. 各章のまとめ
2. 今後の課題と展望
3. 結びにかえて

第1章では、明治維新から1900年代初頭における、国内での柔道、柔術の展開過程が論じられている。

第1に、明治以降の新しい社会に適合し得ずに衰退の過程を辿ったとみられがちな柔術の生存の過程の照射、第2に、嘉納治五郎の柔術像（観）＝ある種の柔術の「墮落」理解の検討である。武道の海外伝播の複層性を浮き彫りにすることを主題する本研究からすれば、本章は前提的な位置にあるが、しかし本章によってあたかも柔道が柔術を乗り越えて、近代社会における武道の盟主となったかの国内における武道の歴史像、すなわち、しばしば無自覚に柔術・柔道の海外への伝播に援用されている、本論文の根幹と結節すべき通説が批判的に検討されている。嘉納が否定した見世物的娯楽が現地社会でなぜ受容されたのかという問いの回答を、民衆の無知や低俗性に求めてしまいかねないばかりか、そこで生み出された価値創造的契機がほとんど検討されないまま、「亜流」や「異端」として括られ、歴史の片隅に放逐されている研究状況を批判的に分析している。

第2章では言説活動を通じた柔術・柔道の海外への紹介が検討されている。

第1に、嘉納治五郎らの英語論文に見られる柔術の日本起源論への強い拘泥の意味を析出している。そ

れは日本文化としての歴史的固有性を主張するうえで必須の作業だった。これとは対照的に、第2に、ラフカディオ・ハーンとエルヴィン・ベルツによる柔道・柔術論を論じ、一方で彼らが柔術や柔道を高く評価しながら、しかし他方で中国招来説をもって柔術の起源を論じていたことを明らかにしている。ハーンやベルツらは、柔術・柔道を日本（文化）の特徴・象徴として描きながらも、同時に文化の本質的土着性に基づいた柔術・柔道の理解を巧妙に解体していった。第3に、「小さな」日本人が機知と技量を用いて、無理解で高慢な筋骨逞しい外国人を制する様子の描写を通じて、通史における外国人の二面的な役割を考察している。外国人を日本文化の敵対者としての役割と、庇護者としての役割という、真逆でありながら相補的なベクトルのもとに付置することで自文化の存在意義を浮き彫りにしようとした歴史像を考察している。

第3章では、日本人柔術家・柔道家による前世紀転換期における北米への普及活動の多様性が浮き彫りにされている。

第1に、見世物や娯楽としての柔道の活用を忌避する嘉納の思想が、柔道の海外普及に際しても一貫していることを確認している。山下義韶による現地社会の上層への普及活動は、嘉納の目論見を忠実に反映したものであった。第2に、山下と同時期に渡米した柔道家の前田光世は、山下型の普及が頓挫したことで、見世物試合という新しい普及活動に見出し、その活動を通じて嘉納の柔道観を逸脱する思想を形成していった。この点で前田の言動は、たとえ柔道という枠組みそのものを脱構築するには至らないにせよ、非エリートの柔術家による活動と一定の親和性を有している。第3に、それにも関わらず前田は自身と柔術家の活動の差異を強調するが、前田が忌避した柔術家の山師的側面こそが、柔術の受容に際しての重要な要件でもあった。この点で、柔道が確固たる理念を有するがゆえに、その説明と理解という過程を踏む必要性から免れ得ないことと対照的に、柔術は、現地の社会的要請や民衆の関心と結合することで、受容側の主体的な解釈や意味の読み替えが可能となり、結果的に異文化の自文化への編入を容易くさせた点に着目する。

第4章では、ジョン・J・オブライエンとリッシャー・W・ソーンベリーという2人のアメリカ人を研究対象とし、長崎外国人居留地における両名と柔術との出会いから、帰国後における活動が論じられている。

第1に、外国人居留地に外国人と武道という日本の身体運動文化との出会いの契機としての役割を見出している。さらに、外国人の内地雑居に厳しい制限があった時代において、そうした出会いを可能とする基盤に、居留地独特の制度や環境があった事実に着目する。第2に、両者による帰国後の活動場所の豊富さを明示している。オブライエンは、高等教育機関・劇場・警察・政府機関・体育協会・新聞メディアなどを通じて、広範な活動を展開し、ソーンベリーは、駐屯地で柔術を教授したが、当時の全米各地の駐屯地における同様の取り組みからは、兵士育成の手段として受けた柔術への一定の評価が見出せる。第3に、1905年に両者が出版した柔術教本を通じて、柔術の伝播に際する受容の多様性を検討している。このうちオブライエンの教本は、商業的な身体運動である“Physical Culture”や身体医文化と結節することで、柔術を健康法や身体鍛錬の一環として受容する余地が生じ、ソーンベリーの教本からは、ある意味での流派の継承を読み解ける。

第5章では、日露戦争期の柔術ブームを検討しながら、同時代におけるアメリカの柔術の受容の実態が論じられている。

第1に、現地新聞や大衆雑誌を活用して、柔術ブームと帝国主義的な心性や大衆文化の進展との関連を扱っている。第2に、ハリー・I・ハンコックが出版し、大反響を巻き起こした柔術教本を通じて、現地における二次的な伝播回路の形成を論じている。ハンコックの教本には、とすればアメリカに優越する日本の姿を描写するような、意図せざる倒錯も含まれていた。第3に、柔術の優越性の主張は、民衆にアンビバレントな感情を引き起こし、やがて柔術とレスリングとの試合やアメリカ体育協会での柔術の「解剖」を通じて、現地文化と日本文化との優劣関係の再修正が施された点に着目する。他方でこれらの作業を通じて、理念やイデオロギーなど数量化や可視化のできない領域が削り取られたことで、柔術の現地社会への編入を容易にする素地が形成されたであろう点を重視する。第4に、だからこそ柔術ブームの後も、技術としての柔術は原型を失いつつもレスリングの一部として受容され、柔術は、武器を「持たざる」女性たちによっても活用された点を指摘する。

第6章では、アルゼンチンへの武道の伝播について、福岡庄太郎という市井の柔術家の足跡を辿りながら論じられている。

第1に、日露戦争での日本が勝利によって、日本を西洋化した東洋とみる論調がアルゼンチン国内で高まり、こうした日本への関心の増大と柔道・柔術への眼差しには一定の連動性が認められること。第2に、現地新聞を通じて、現地における柔術への眼差しを精緻化している。たとえば、ある記事からは同国の国家的目標たるフランスを介した柔術への高い評価と、柔術という文化の宗主国たる日本への評価の留保という二重性が見出せる。それは、柔術のナショナルな預木からの解放を示す一方で、文化帝国主義的な文化の序列化を表わしている典型とみる。他方で、しかし欧米でしばしば嫌悪された柔術の狡猾さをむしろ肯定的に評価する言説も見出せる。それを同国の国民的な気質とされる「ビベサ」との関連で読み解けば、必ずしも従属的、受動的に柔術を受容しただけでなく、そこに現地独自の意味解釈を施した様子も窺える点に着目する。第3に、青少年の愛国心を涵養する手段として身体鍛練と精神教育が、ホアン・B・アロスピダガラというスポーツクラブでも受容されている点に着目する。スポーツクラブは、一定の開放性や様々なスポーツを介した人的ネットワークを有しており、従って柔術がスポーツクラブを基盤に展開されることで、柔術はその固有性が希薄されながらも、現地の人口に膾炙されることにも繋がったと評価する。

第7章では、前章に引き続き福岡の活動をもとに、パラグアイでの柔術の受容過程が論じられている。

第1に、現地新聞をみれば、自国民の教化を背景に娯楽的要素の強いスポーツは批判される傾向にあり、心身修養的な剣術や身体体操が評価されている。柔術は、この点では後者の文脈で捉えられている。第2に、前章と同様、Club Gimnasia y Esgrima (以下 CGE) というスポーツと社交のクラブにおける柔術の受容を扱っている。CGE にはある種の階層分断的な閉鎖性が認められるが、他方で民衆の支持を得るために、積極的に娯楽を提供しており、柔術もまたその手段として活用された。こうした柔術の価値付けは、現地社会の住人による能動的な意味付与に基づいていると判断する。第3に、CGE による福岡の試合を通じて、社会の様々な階層の人々の柔術に対する眼差しのありようを考察している。平等や実力主義の世界が表現された試合の場は、日常的な階層秩序から一定解放されており、観衆は自己の夢が演じられる

世界に没入した。また、観客たちは必ずしも娯楽を受動的に受容していたわけではなく、多様に試合を解釈し、ときには異議申し立てをする余地も残されていたとみる。第4に福岡は、警察などで柔術その他のスポーツを教授することで、人的ネットワークの確立と社会的地位の上昇を果たした点に注目する。

2. 本論文の研究上の特徴

本論文は武道の海外（主として南北アメリカ）への伝播過程を論じるに際して、従前の研究では欠落していた以下の視点を重視し、新たな歴史像を構築しようと試みている。

第1に、武道の海外伝播を普及と受容の双方向の観点から読み解くことで、そのダイナミズムを探ろうとしていることである。すなわち、現地社会からの意味付与に基づく武道の再解釈や活用を、単なる文化的固有性の希薄化というよりはむしろ、受容サイドのある種の価値創造的な契機と捉えることで、文化生成の営みとして武道の伝播を捉えようとしている。このような研究上の視座は、文化の正当／正統性や固有性の固執にともなう懐古趣味や固有性「喪失」への慨嘆へと逢着しがちな、武道研究における従前の歴史像を乗り越えることを意図するものである。

第2に、武道の伝播史を身体運動文化の歴史と関連付けて論じることで、前世紀転換期における身体運動文化の世界史的な展開過程の文脈に武道の歴史を位置づけようとしている点である。すなわち、必ずしも武道は日本固有の文化としてのみ描き得ない側面を有しており、この点を等閑視してその伝播の歴史を描くことは史実との点で乖離が生じる。武道の海外伝播は、非西洋文化の西洋文化圏への侵入という二項対立の図式のみでは十分に説明できない、複雑かつ複層的な関係性を含みこんでおり、文化摩擦や対決の視点とともに、相互作用や相互浸透の過程を描く必要がある。

第3に、普及と受容、あるいは武道と他の身体運動文化が織り成す複層的な編み合わせから生じた二次的な伝播回路や変種文化を、「否定的」な契機とみなすのではなく、多様かつ豊かな文化交流の歴史像としてその社会史的意義を明らかにしている。ここでは、とりわけ文化の宗主国側が付与した特定の理念やイデオロギーの制約から、現地社会の住人がある程度解放されるような場や空間、即ち見世物試合、スポーツクラブ、あるいは現地で出版された教本などが着目されている。従前の歴史記述の中心が「大規模な武道団体の後ろ盾を有したエリートによる理念を伴う普及と、受容側の社会の上層におけるその文化の『正しい』受容」にあったとすれば、本研究はそれを批判的に摂取しつつ、新たな歴史像を提示しようとしている。

歴史像を描く際には「上（＝エリートや社会の上層）」から、あるいは「外（＝日本や普及側）」からの眼差しと、「下（＝民衆が住む生活世界）」から、また「内（＝受容側や現地社会）」からの視点を交差させることが重要であると考え、本研究は武道の伝播とは無関係にもみえる、民衆が紡ぐ日常生活や現地社会の基盤、文化的土壌を含めて考察することで、このような歴史的な意義に（歴史的事実）迫ろうとしている。本論文は、したがって武道の海外伝播の歴史を重層化するだけでなく、これまで歴史的にほとんど等閑視されていた人々や出来事を歴史の表舞台に登場させようとしている。

【論文審査の結果の要旨】

1. 本論文の基本的評価

2010年6月24日に主査・副査、そして研究科教学委員出席の下、公聴会が開かれた。そこでは本論文に対して以下のような基本的評価ならびに意見が提示された。

冒頭、副査から本研究は力作であり、優れた論文であることが強調された。本研究の優れた点としては、第1に、研究の視点（捉え方）がよく、論旨も明快なことである。先行研究の分析も丁寧になされている。とりわけ、本研究が日本固有の文化であると言われている武道の海外伝播のありようを、日本中心主義から離れてきめ細かく論じている点、「普及」と「受容」のダイナミズム（多様性）を浮き彫りにした点は大いに評価されてよく、本論文によって武道伝播の歴史像は確実に豊かになった。しかも、武道「普及」のプロセスに武道と関係性をもった外国人を含めている点も「普及」の回路を豊富化している。このような点において、本論文は画期的な研究であるといっても過言ではない。

第2に、武道の伝播の歴史像を普及側の思惑の多様性ととも、受容サイドの視点も十分に考慮して描こうとしている点も評価できる。南北アメリカ（たとえば、アルゼンチンにおける「ビバサ」との関連）における、具体的な史実の解明はこの点を雄弁に物語るものである。こうした研究手法は従来の武道研究において等閑視、あるいは少なくとも軽視されてきたことであり、本研究はこのような研究面におけるある種の弱点を執拗に克服しようと心がけている。

第3に、武道研究の幅を広げ、そして掘り下げている点である。武道研究は武道史研究が決定的に欠落しており、それは歴史研究者がこれまで武道史に本腰を入れて論じてこなかったからであるが、その結果、ある識者の発言がそのまま無批判に「史実」となってしまう場合が少なくなく、本論文はこうした従前の研究の枠組みを組み替えている。

第4に、本論文が歴史研究という側面を強く持つ以上、歴史研究の方法を踏まえた説得力ある論述が求められるが、本論文は丹念な史料分析をはじめ、歴史研究の方法を踏まえ叙述されている。たとえば、本論文では同時代の柔術教本（和文・英文・西文）、現地新聞（アメリカ、アルゼンチン、パラグアイの新聞）、文書館にあるスポーツクラブ関係史料、移民関連史料などが豊富に活用されている。こうした史料は現地を複数回訪問した際に文書館などで入手できたもの、現地の日系移民関係者とのネットワークで得られたもの、デジタルアーカイブスを活用したものなど様々である。もっとも現地新聞の記事の中には、たとえば異種格闘技試合の内容を意図的に歪めるか、あるいは誇張している可能性もあり、この点での史料批判は欠かせない。とはいえ、全体として、こうした新たな史料の入手と分析なくして、従前の歴史像の修正あるいは変更は困難だっただろう。

2. 本論文の課題

本論文は課程博士請求論文として秀逸したものであるが、この基本的評価を前提に、以下に何点かの課題を記しておきたい。

第1の課題は、本論文で最も力を傾注した点、すなわち受容側の民衆が生み出す価値創造の中身をより具体化、精緻化することである。本論文では民衆について（男女、年齢、階層性など）深く論じられているわけではない。問題はしかし、こうした民衆の定義の有無ではなく、民衆がなにほどかの価値を柔術に見出すといった（論文では意味付与）場合の価値や意味の性格や機能が深く考察されなくてはならない。本論文では安丸良夫の民衆史、ならびにそれを援用した高津勝の民衆スポーツ史研究の成果が着目されている。たとえば祝祭に内在する民衆の解放あるいは対抗的な自己意識の表明は、確かに社会構造の裂け目を通して割り込む逸脱的な行為であるが、しかしそれはある種の共同体に属する者の資格を梃子にした秩序化の契機ともなるのであって、本論文が扱う異種格闘試合という祝祭空間で醸し出される柔術に対する民衆の価値創造は、この場合、どのような機能を果たしていたのか問われなくてはならない。それは日本

「固有」の武道の理念の脱色と民衆の意味創造という視点だけでは見えてこない、しかも決して小さくない問題である。

この点と関連して、第2に、海外への伝播に際して、何が受容され、何が受容されなかったのか、その行為に内在する意味を解明する必要がある。たとえば、文明化の過程で情動抑制が図られていく中で、民衆は時として暴力衝動的な事柄（残存物）に惹かれるが、この受容の際に表れる民衆の「主体性」の中身が深められなくてはならない。それとは反対に、日本「固有」な武道をそのまま受容するかに見える行為の中にも、近代社会形成過程における広範な人びとの価値の内面化と主体形成の側面が含まれていないかどうか吟味する必要がある。このような課題は、歴史研究あるいは武道研究とともに社会学の諸潮流（カルチュラル・スタディズ、グローバリゼーション等）の中に本論文を意味づけていくことを要請している。

第3に、本研究では、「日本」文化たる武道の「西洋」への輸出という、単線的かつ二分法的な歴史解釈を乗り越えることをひとつの目標としてきたが、その試みもさらに精緻化する必要がある。すなわち、本論文では「日本」文化が「西洋」の文法に基づいて肉付けさる、あるいは両者の文化が混交する様相を扱ったが、そうした作用や行為が生じる場において、「日本」や「西洋」が意味する中身については必ずしも十分な検討が及んでいない。また、実際に伝播した武道は、ナショナルな文化であると同時に、その文化が誕生した諸地域のローカルな伝統や価値観を含み込んでいるはずであり、武道の伝播に先んじて受容側に根付いていた西洋由来の身体運動文化も現地社会からの何らかの影響を受けているはずである。したがって、武道のグローバルな伝播を問う際には、そもそも「西洋」あるいは「日本」というカテゴリーの精緻化はもとより、ナショナルなレベルとローカルなレベルを相互に接合させて分析する視座が重要となる。

第4に、武道の伝播を東アジア圏にまで拡大する必要がある。特に前世紀転換期の朝鮮半島や中国大陸の沿岸部では武道を介した文化交流が盛んであり、世界的な帝国主義の時代状況にあって、日本からの大陸浪人の進出なども関連しながら、東アジア地域における武道の伝播のありようを浮き彫りにする必要がある。この点は日本「固有」の文化＝武道という通説的な理解にも研究のメスを入れてきた本論文の視座とも関連する。柔術の世界への伝播は一国史の観点でのみ理解されるわけではなく、よりグローバルな視点から伝播の様相を俯瞰すべきであろう。

第5に、海外への武道の伝播史を精緻化するうえでも、日本国内における武道の様態を明らかにする作業が求められる。近代文化としての武道、とりわけ柔道の進展と反比例して、柔術がその前近代性のゆえに衰退していったという歴史解釈は、本論文で的確に論じたように妥当とは言えない。むしろ、地方の習俗との結びつきや国家神道との接合、あるいは社会構造の変容にともなって、旧来の柔術に新しい意味や役割が付与されることも少なくなかったと考えられる。民衆史、民衆スポーツ史、民衆娯楽研究そして社会学などの研究成果を援用しながら、武道を民衆の生活の位相において捉えていく研究が求められる。

以上、公聴会と論文審査の議論により、審査委員会は本論文が博士学位を授与するに相応しい水準に達していると判断した。

【試験または学力確認の結果の要旨】

審査委員は上記公聴会の質疑応答を踏まえ、各審査委員の意見交換の結果、藪耕太郎氏の博士（甲号）

の学位請求論文について、学位規程第18条第1項に基づく「博士（社会学 立命館大学）」を授与するに値するものであると全会一致で判断した。

なお、藪耕太郎氏は博士課程在学中に著作（共著）1（単著論文2本）、学術論文4本（全て単著）（学会誌〈査読有〉2本、その他2本）、学会報告4回（全て単独報告）、その他の研究資料4本を刊行している。そのうち、日本体育学会学会誌『体育学研究』（第53巻、2008年）に掲載された原著論文「武道の海外普及に関する一考察——1910年代のパラグアイにおける受容側からの視点に着目して」は、同年度の学会賞（和文論文の部）にノミネートされており、同学会において高い評価を得ていることを付記しておく。

審査委員 （主査）有賀 郁敏 立命館大学産業社会学部教授
 （副査）山下 高行 立命館大学産業社会学部教授
 （副査）井上 俊 大阪大学名誉教授